

書き続けた日記。

今は思い出に。

今年百歳を迎える玉城ノリ子さん。一世紀、多くの人々が経験したことのない長い時間、何を見て、何を感じ、どのような人生を歩んできたのかを聞きました。インタビューから、玉城さんの陽気で優しい性格と、ハジカサー（恥ずかしがり屋）な面が垣間見えます。

玉城 ノリ子



「毎日書き続けた日記。今では35冊となりノリ子さんの足跡に。」

番台に立つようになり始めた頃から、銭湯の帳簿をかねて日記を書くようになったノリ子さん。「ガソリンとか、ほかにも銭湯には必要なものがあるから、お金の出入りを管理しているうちに、毎日書くようになった」と話す。子どもが生まれてからは、今でも思い出すほど忙しくなり「自分の事は全部後回し。子どもたちのご飯を作るために、風呂屋の二階にある家に帰るけど、その間は番台には誰もいないから、よく一階のお客さんから呼ばれていたよ。そんな生活だから、いろいろ忘れないように日記を書いていたよ」と話す。

そんな中、ご家族からお借りした当時の日記を目にしたノリさんは、「懐かしいね。大事に保管してくれている娘にお礼を言わないとね」と優しい顔でほほえみ、「字を書くのが好きではなけれど、お金の管理するのが好きで続けていたね」と話す。

確認できる日記は全部で35冊にのぼり、一番古いノートには「昭和47年」と記され、長い月日の流れを感じる。



「子どもは自然の授かりもの。健康の秘訣はないよ。」

ノリさんは、旦那さまと銭湯を切り盛りしながら、6男2女の子どもたちを育てた。当手を振り返り、子どもが多く、大変でなかったかと聞くと「子どもは自然にいただいたもの。ほしくて子どもができない人もいる。多くの子を生むことができるのに、生まないのは自分にも失礼」と真剣なまなざしで話しながらも、孫やひ孫の話をするとき「もう多くてわからないよ」と恥ずかし

「どこにでもいる子が銭湯の経営。毎日のお風呂掃除が日課に。」

字糸満で3人姉弟の長女として生まれたノリ子さん。「弟はディキヤー（できる子）で、アメリカの大学に行っていたよ」と話し、そんな弟さんと比べて、ノリさんは「私はどこにでもいる普通の子だった」と当時を振り返る。ご家族から計算問題と書道が得意と聞いていますよと話すと「そんなことないさ。小学生の頃からみんなと同じことしてきたから、みんなと一緒に」と恥ずかしそうに話す。

糸満市内の銭湯と精米所を経営されている旦那さまと結婚され、毎日が怒濤の日々を過ごしたと言う。「毎日から風呂掃除。その後は番台に立って、一日中お客さんの相手をしていたよ。せっかく風呂屋に来てくれるから、きれいなお風呂で迎えたいと思って、掃除は隅から隅まで掃除していたよ。旦那はフュー（怠け者）だから、手伝わてくれないけどね」と、旦那さまの文句を言いながらも、夫婦二人三脚で銭湯を経営されていた当時の様子を笑顔で話す。

そうに話す。

現在、平日はデイサービスに通い、施設の人から「本人はまだ百歳って思っていないはずよ」と冗談を言われるノリ子さん。本人に健康の秘訣を聞くと「何もしてないよ。ご飯も小食。食べ物には魚よりも肉が好きだからかね」と話す。

インタビューでは時折冗談を交えて話をするノリ子さん。これからも末永くお元気であることを願います。

Profile

玉城ノリ子(たまきのりこ)。大正12年生まれ。旦那さまと結婚し、戦前から続く銭湯「ひかり湯」と精米所を営みながら、子育てに奮闘した。現在、平日はデイサービスいちまんに通い、レクリエーションや人との交流を楽しんでいる。

